

関西大学創立者手塚太郎と漫画家手塚治虫

湯川敏治

読者の方も既にご存知であろう。漫画家手塚治虫が本学創立者の一人、手塚太郎の孫であることを。そこでこの二人の間柄を明らかにしておくことも無駄ではないと思ひ、以下にまとめた次第である。

治虫の妻、悦子が治虫没後に夫を回顧して『夫・手塚治虫とともに―木洩れ日に生きる―』（講談社 一九九五年一月）の中で太郎と治虫のことを次のように伝えている。

父「悦子の父―湯川注」政司は東京へ出てきて、早稲田大学の法学部英法科を卒業し判事となりました。

大正十年、長崎の地方裁判所を皮切りに、久留米、徳島などの地方裁判所を転々としたようです。長崎控訴院に勤めていた頃、岸本速女と見合い結婚をしました。その仲人をしたのが、当時の上司、長崎控訴院長をしていた手塚太郎です。手塚治（治虫はペンネーム―悦子注）の祖父でした。

右の文の後には手塚家と岡田家（悦子旧姓）の家系図が掲載されている。

創立者手塚太郎について、『関西大学百年史 人物編』（学校法人関西大学 昭和六十一年十一月）には、



手塚太郎

次のように記されている。

創立者中最年少の手塚太郎は文久二年（一八六二）一月十六日の生まれ。法学校の書類には東京府士族とあり、また内閣所蔵の履歴書には長崎県士族とある。おそらく長崎在勤の幕臣の家に生をうけたのであろう。父良仙、母津祢の長男であった。

とあり、続けて太郎の経歴を見ていくと、明治九年、司法省法学校に入學、同校第二期生として司法官育成のエリート教育をうける。司法省法学校では首位の成績を修

め、学業優等により明治十七年（一八八四）七月に卒業と同時に司法省御用掛、第七局詰を申し付けられた。第七局は司法省法学校を所管する部局で、助教に採用されたのである。同年十二月にはこの司法省法学校が廃止され、文部省直轄の東京法学校に移管されるとともに、文部省御用掛を命ぜられ、さらに、翌十八年十二月司法省御用掛兼務のまま東京大学予備門御用掛兼務を命ぜられた。

明治十九年一月、司法省が司法官養成の仕事を文部省に譲り渡した時点で、太郎はやつと後輩育成の仕事から解放され、専任の司法官となった。すなわち同年五月検事・千葉始審裁判所詰に任せられ、二カ月後に大阪始審裁判所詰に転じた。

大阪には太郎の先輩の小倉久、同期の志方鍛・鶴見守義が既に在任しており、続いて先輩の井上操や教官の堀田正忠も着任した。太郎を含めいづれも司法省法学校出身の六人が本学創立者となるのであるが、相次いで配属は、偶然ではなかった。『関西大学百年史 人物編』

によれば、大阪国事犯事件^①の開廷に備えるため、井上は裁判長、堀田・小倉は担当検察官、志方・鶴見・手塚の三人はこの事件の予審のための判・検事として配属されたものだという。

上述の通り、志方、鶴見は太郎と同期の法学校二期生であるが、井上・小倉は法学校一期生で太郎の先輩にあたり、堀田は司法省法学校教官のフランス人ボアソナーの通訳を勤めた人である。関西法律学校の創立が司法省法学校の出身者たちによってなされたことは、大変注目すべきことであろう。このような経歴を持つ人々とともに、太郎は関西法律学校の創立にたずさわることになったのであるが、開校後は法学通論・刑法・フランス民法などの講義を受け持ち、チャキチャキの江戸っ子弁の講義は、学生の間で大好評を博したとのことである。

さて太郎は関西法律学校創立にたずさわって後、明治二十五年九月、大津地裁検事正に転出。三十年十二月には函館地裁検事正、翌年七月には判事・仙台地裁所長に転任、三十四年六月再び大阪へ戻り大阪地裁検事正、三

十七年四月名古屋控訴院検事長を歴任した。明治四十三年三月から一カ年、欧米各国へ派遣され、帰国後の大正二年（一九一三）四月に長崎控訴院長にすすんだ。また大正三年八月には佐世保捕獲審検所長官を兼ねている。この長崎控訴院在任中に冒頭に掲げた手塚悦子の父で、太郎の部下の岡田政司の結婚に際し、仲人をつとめたことになる。大正十四年一月、六十三歳で退職。晩年は宝塚に住み、昭和七年（一九三二）十一月十九日没した。享年は七十歳であった。

治虫は昭和三年十一月三日生まれであるため、太郎は治虫が満四歳の時に没したことになる。治虫は祖父の太郎のことを知っていたことはたしかであるが、その家系のことについては、どの程度知っていたであろうか。まず太郎の父良仙のことについては、治虫に「手塚良仙と適塾^③」という論考があり、その中で、次のように述べている。すなわち、

四代前^④の先祖（良仙^⑤湯川注）が、府中藩（常陸国^⑥湯川注）松平播磨守の侍医だった、ということ

は、以前からうすうす知ってはいた。

と、手塚太郎の先祖は常陸府中藩の松平播磨守の侍医であつたことを述べている。(長崎在勤の幕臣の家に生えうけたという『関西大学百年史 人物編』の記載は訂正する必要がある)

ところで、治虫がこの話を持ちだした背景には、次のようないきさつがあつたことが考えられる。ルポルタージュ作家の天下英治氏は、治虫の伝記^[3]を執筆した中で、治虫が昭和五十五年(一九八〇)の秋、順天堂大学の大挙祭で講演を依頼されたときに触れている。それによると治虫は講演で、詳しいことは分からないがと断つたうえで、祖先が医者であつたことを語つたところ、順天堂大学のある学生から深瀬泰且氏の論文「歩兵屯所医師取締手塚良斎と手塚良仙^[5]」が送られて来たのである。この論文の内容を紹介する前に、九ページの「手塚家系図」により良斎と良仙の關係を見ておきたい。九ページに掲出の「手塚家系図」は冒頭の手塚悦子の著書に掲載された「家系図(岡田家・手塚家)」と深瀬氏が

論文の中で作成された「手塚家及び太田家系図」をもとに私が合体させ作ったものである。まず良斎は良仙光照の二女と結婚している良斎政富のこと。太郎の叔父に当る。次に良仙は医師手塚家の通名だったらしく、この系図でも三人いるうち、良仙光亨、すなわち太郎の父であり、良斎には義兄に当る人物である。このことを深瀬氏は論文の中でくわしく論証しておられる。

さて深瀬論文の内容は、幕末のあわたたしい内外情勢のもとで、幕府が兵制改革の一環としての軍医制度、すなわち歩兵屯所附医師制度を発足させたのであるが、そこでの医師の活躍を記す『医学所御用留』の紹介に始まる。『医学所御用留』は順天堂大学山崎文庫に蔵される写本で、原本は見あたらないことから、まず記載内容の分析を行い、記主を割り出す作業を試みている。文久三年(一八六三)三月十三日から慶応四年(一八六八)四月までの歩兵屯所附医師の日誌であるが、本文の第三丁は良斎の経歴を中心に記されていることから、記主を手塚良斎と断定し、続いて良斎の出生や出身、手塚良仙光

照の門下に入った経緯、良仙光照の二女と結婚したことなど、『医学所御用留』に記す良斎の経歴を紹介する。

また『医学所御用留』には手塚良仙のことも記されており、良仙の考察に進み、始め良庵を名乗り後に良仙光亨となる人物であることをつきとめる。さらに良庵の名は『適々斎塾門人姓名録』にも「常州府中手塚良仙^{がら} 良庵」と見えることから、緒方洪庵の第三五九番の弟子であったことにも言及し、洪庵の残した『勤仕向日記』で師に添う良庵の姿を紹介する。その過程で先述の「手塚家及び太田家系図」を作成し掲出されている。

手塚良仙・手塚良斎に共通することは、幕末に創設された歩兵屯所附医師として、「近代軍医にも比すべき医療活動に従事」するとともに、蘭方医として、お玉ヶ池種痘所建設資金募集において、資金拠出人名簿に名を連ねていることである。

お玉ヶ池種痘所とは、後の東京大学医学部であって、安政四年（一八五七）八月、江戸在住の蘭方医大槻俊斎・伊東玄朴・戸塚静海らが協議し、種痘所開設願いを

幕府へ提出し、翌五年正月許可されたのである。ちなみに種痘所開設願いの提出に加わった大槻俊斎は良仙の妹海香を娶っている（手塚家家系図参照）。種痘所開設が許可されたことにより、建設資金を募集し開所に備えることとなるが、そこに費用を拠出した八十三名の中に良庵（良仙）・良斎の名が含まれており、「資金拠出人名簿にのる人々は、師弟関係・姻戚関係によって糾合されたものとおもわれる」と結論づけておられる。この論文は、近代軍医制度及び近代医学史を知る貴重な論文であると言える。

治虫はこの論文にヒントを得て、深瀬氏にも会い、自分の先祖を長編漫画『陽だまりの樹』の主人公に描くことになる。『陽だまりの樹』は、小学館発行の青年向け雑誌『ビッグコミック』に昭和五十六年（一九八一）四月二十五日から同六十一年十二月二十五日まで約五年半連載され、時代を幕末にとる。主人公は手塚良庵と、架空の人物伊武谷万二郎である。

深瀬論文によれば、緒方洪庵の『勤仕向日記』には、

良庵は洪庵が四人の子供に施す種痘の場に立ち会ったことが記されているそうで、洪庵に付き添う「よき弟子」として師を助けて活躍している」姿と深瀬氏は感想を持たれている。しかし治虫は漫画化するにあたり先祖良庵の性格を『福翁自伝』の次の記事から取った様子である。すなわち、

江戸から来ている手塚という書生があつて、この男はある徳川家の藩医の子（諭吉の思い違い。常陸府中藩（松平家）の藩医の子₁₁湯川注）であるから、親の拝領した葵の紋付を着て、頭は塾中流行の半髪で太刀作りの刀を挟んでいるという風だから、如何にも見栄があつて立派な男であるが、どうも身持ちが善くない。

とあつて、以下、諭吉は毎夜のように廊通いをする良庵の行動を止めさせ、勉強に専念させる。そのとき、良庵から今後廊通いをせず、違反すれば坊主になる旨の念書を取るが、勉強に没頭する良庵の姿は、諭吉にとり面白くなく、塾仲間と謀つて、遊女の偽手紙を作り、良庵を

再び廊へ行かせようと仕向け、その結果、廊へ行こうとする良庵を捕まええ念書違反で坊主にしようとした。良庵は謝り、塾仲間に酒を振る舞い一件は落着する話である。どうも良庵は最初から諭吉の仕組んだ異にかかり、酒肴をおごらされたようである。

治虫は『陽だまりの樹』では、諭吉の描く良庵を膨らませ、治虫による良庵像を創る。またもう一人の主人公、伊武谷万二郎は朴訥な一本気の性格で、府中藩松平播磨守の江戸屋敷詰下級家臣で、水戸藩の碩学、藤田東湖の思想に心酔。剣は北辰一刀流の使い手として描かれている。この二人は近所に住まいし、善福寺の娘せきをめぐる恋敵の間柄であるが、ドラマが展開するにつれ、喧嘩もするなかで友情が結ばれてゆくという設定である。

伊武谷は安政二年の大地震で、江戸の民衆を安全な場所に導いたりリーダーシップが老中堀田正睦の認めるところとなり、まずアメリカ使節タウンゼント・ハリス警護役に抜擢される。以後、幕臣として意地を通すものの運命の波に翻弄されながら、最後は江戸上野で彰義隊の一

員として明治を知ることなく果てる。

良庵は父良仙光照の意に従い、緒方洪庵のもとで学ぶため、安政二年大坂へ旅立つ。一方父の良仙は江戸で、奥医師を勤める多紀誠斎を中心とした、漢方医たちの妨害に悩まされながらも、仲間の蘭方医とともに、江戸での種痘所開設のため奔走する姿を描く。大坂での良庵については、『福翁自伝』の中のエピソードを取り入れたりしながらドラマを展開させ、種痘所開設計画が具体化しかけたことで、父は良庵を呼び戻す。良庵は緒方塾を辞し、江戸へ帰るのであるが、帰途、船で両親に連れ添われた娘と知り合うことになる。海が荒れて船酔いした娘を介抱することよせ、良庵は両親の知らないうちに娘と一夜を共にする。

良庵は二年ぶりに江戸の実家へ戻った。父は人を迎えに行つて不在であった。迎えに行つた相手は、娘とその両親で遠い姻戚筋にあたるとのこと。間もなく玄関に親子三人の姿が現れ、良庵は驚いた。なんと船で一夜を共にした娘とその両親で、娘は良庵と見合いのため江戸へ

来たのである。娘の名はつね（津祢）で、後に太郎の母となる人であった。良庵とつねの出会い、このようにドラマチックに描かれている。

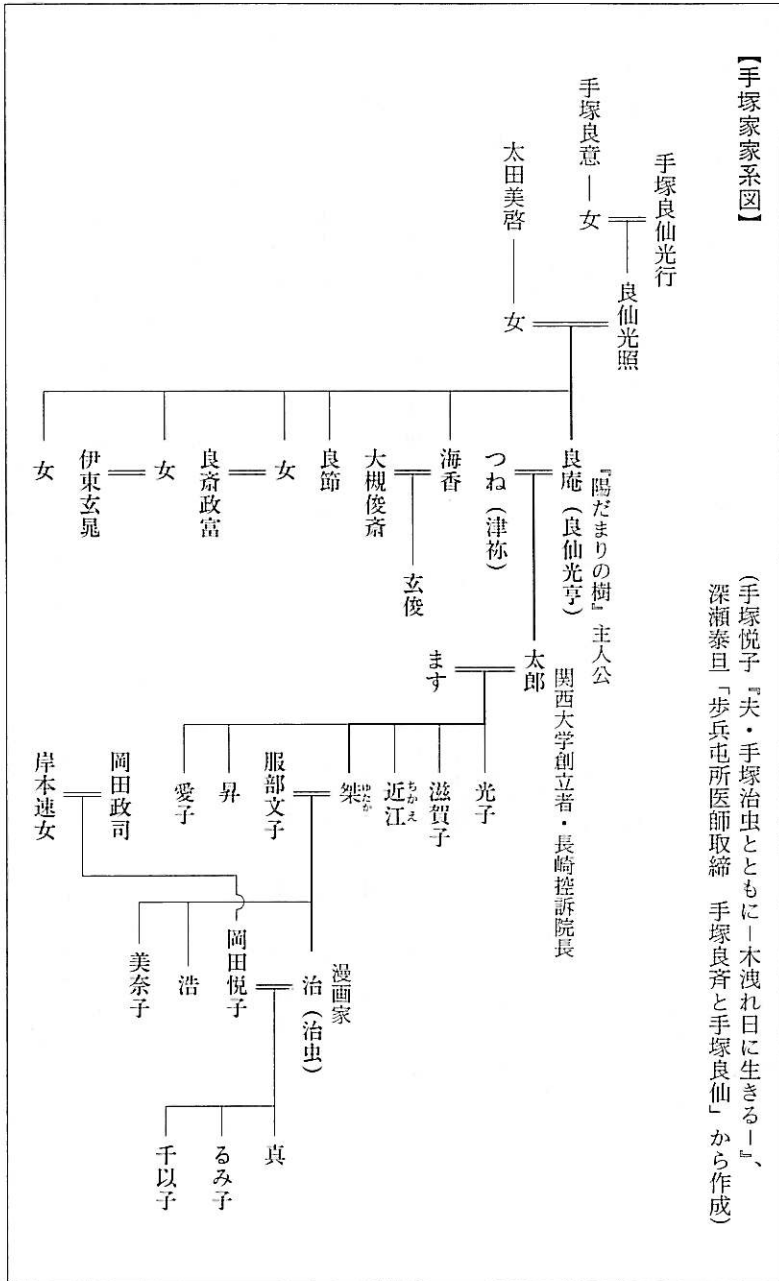
良庵とつねは結婚し、新婚生活が始まるが、しばらくして江戸に流行つたコレラのため母は死に、その後父も文久二年五月二十一日に世を去る。このとき良庵は父良仙の名を襲名し良仙光亨となり、医者を続けることになる。医者としての勤めを果たす一方、女遊びはなおらず、いつもつねから責められることも描かれている。

そうした筋運びの中で、ドラマも終わりに近づいた第十一巻目、維新の章、「ええじゃないか」の一〇八ページ〜一一〇ページの三ページ（二十一駒）だけであるが、手塚太郎の姿が描かれている。

場面は、良仙とつねの夫婦喧嘩が終わった後に太郎が弟（「手塚家家系図」には記載なし）とともに帰宅するところである。太郎は母に長崎のシーボルトの娘稲のもとで律法を学びたいことを申し出る。喧嘩の後であるため、つねは気が立っており留学を認めないのである。そ

【手塚家系図】

(手塚悦子「夫・手塚治虫とともに―木洩れ日に生きる―」、
 深瀬泰旦「歩兵屯所医師取締 手塚良齋と手塚良仙」から作成)



こで父良仙に相談したところ、家業の医者を継がなくて
もよく、長崎行きを許すというところである。太郎は明
治元年に六歳となるが、右の漫画の絵柄はそれ以前のこ
ともかかわらず、実際の年齢より年上に、また年より
勝った言動をとる姿に描かれている。治虫はフィクショ
ンとして太郎を描いたのであろうか。

明治を迎えた良仙は、明治十年（一八七七）の西南の
役に、第二旅団中央小繃帯所付医師として従軍する。ド
ラマの最後は、

その年、手塚良仙は九州の地で赤痢に罹り、大坂の
病院へ送られ死んだ。行年五十一歳であった。私、
手塚治虫は彼の三代目の子孫にあたる。
というナレーションで終わる。

日ごろあまり漫画を読まない方にも、『陽だまりの
樹』は是非一読されることをお勧めする。手塚治虫ファ
ンになられるであろう。

治虫が少年時代を過ごした家は、太郎が晩年を送った
宝塚の家であった。前述のように太郎とは四歳まで一緒

に暮らしたのであるが、数多く残る治虫の著作の中には、
他に太郎のことについて触れたものは見ていない。司法
官であった太郎は、父良仙とは違った性格で、ドラマに
はなりにくかったからであろう。

注

(1) 大阪国事犯事件とは、明治十八年（一八八五）大井
憲太郎・小林樟雄・磯山清兵衛らが中心となって、表
向きには朝鮮独立運動支援と称して、日本国内改革を
行おうと計画した事件で、計画は事前にもれ首謀者以
下全員捕らえられた。

(2) 治虫は生前、大正十五年生まれとしていたが、没後
手塚プロダクションによって、誕生は昭和三年十一月
三日と訂正されている（『読売新聞』一九八九年二月
十日朝刊）。

(3) 手塚治虫「手塚良仙と適塾」（日本興業銀行『新開
業事情』所収一九八六年九月。後に『手塚治虫大全
1』マガジンハウス 一九九二年十二月採録）

- (4) 大下英治「ロマン大宇宙」実録、手塚治虫「潮」平成四年三月号〜同六年五月号。後に「手塚治虫 ロマン大宇宙 上・下」潮出版社 一九九五年三月)
- (5) 深瀬泰旦「歩兵屯所医師取締 手塚良斎と手塚良仙」『日本医史学雑誌』第二五卷第三号(昭和五四年七月)。なお、深瀬氏には、良仙・良斎に関し「手塚良仙光亨知見補遺」(『日本医史学雑誌』第二七卷第一号 昭和五六年一月)、「歩兵屯所医師取締手塚良斎政富」(『同』第三二卷第四号 昭和六〇年十月)がある。
- (6) 注(5)同書
- (7) 富田正文校訂『福翁自伝』(岩波文庫 一九九六年九月第三八刷)
- (8) 『陽だまりの樹』は小学館から四六判(ハードカバー)版・A6判(文庫版)・B6判の三種類発行されており、それぞれ巻数も異なる。本稿で用いたのは、B6判(ビッグコミックス 昭和六二年五月)の全十一巻本である。

本文にあげた書物の外、太郎と治虫のことに触れたもので、私が知ったものは次のとおりである。

- ① 桜井哲夫「手塚治虫―時代と切り結ぶ表現者」(講談社現代新書1004 一九九〇年)
- ② 今川清史「空を越えて 手塚治虫伝」(創元社 一九九六年)
- ③ 桜井哲夫「手塚治虫」(『国史大辞典』15上 補遺)吉川弘文館 一九九六年)
- ①は、東京経済大学教授である著者が、手塚の漫画作品が発表された時代と、その時の時代状況をリンクさせ論評を行ったもので、プロログからエピログまで八章で構成されており、治虫が少年期を送った宝塚で生活が後の作品に与えた影響を論じる中で、わずかではあるが太郎とのことにも触れている。
- ② 著者は元小学校教諭で、現在は歴史小説家。治虫にかかわる人々に会い、聞き取りを行い執筆した治虫の伝記。構成はプロログ・エピログには含まれた十四章からなり、いくつかある治虫の伝記には、触れられていなかった太郎の

ことについて、最初の一章で触れているが、表現は小説風となっている。

③は、①の著者による手塚治虫項の説明でわずかに太郎のことにも言及している。

〔後記〕

私は子供のころから漫画が好きで、中でも手塚漫画のファンであった。そのため当時の少年少女雑誌の付録の手塚漫画を今日も百冊ほど持っている。ある機会に大阪市立中央図書館で展示のため、それらの借用依頼を受けたことが契機で、手塚治虫のことについて調べることとなり、彼の作品は当然のこと、作品に関する評論・伝記・個人評・新聞や雑誌の記事などあらゆるものを手あたりしだい集め、読みまとめた。そのことで関西大学史学・地理学会で発表する機会もあった。本論は史学・地理学会で発表したことと内容は異なる。それだけに本学教授菌田香融・帝塚山学院短期大学教授鶴崎裕雄の両先生からは数多くご教示を賜わり、また資料の存在は知っていても読んだことがなかった論文もあり、堺女

子短期大学教授浅井允晶先生や宝塚市立手塚治虫記念館の村上淳一氏からいろいろご教示を賜った。謹んで感謝する次第である。

(ゆかわ としはる 日本電信電話株式会社勤務
昭和43年関西大学文学部史学科卒)